●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成 24 年 西雲寺だより　秋号（28 号）

報恩講のご案内

10月17日(水)～19日(金)

17日・・・・・・・・　お逮夜(2:00～)　お初夜(7:00～)

18日 お日中(10:00～)　お逮夜(1:45～)　お初夜(7:00～)
└御伝抄拝読　└御伝抄拝読

19日 お日中(9:30～)

法話 美浜 南 真琴師（18日～）

18日はバスが出ますのでご利用下さい。

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居経由
坪谷発(9:00)
常森発(9:00)～鮎川～小丹生経由

おさそい合わせの上　多数ご参詣下さい

もくじ

２～３ページ　親鸞聖人のご生涯・晩年の親鸞
４～５ページ　寺屋敷跡～西雲寺の歴史を訪ねて～
６ページ　寄稿（亡き人からの教え）　詩
７ページ　福島の子供たちお寺にホームステイ♪
８ページ　山門掲示板の言葉　門徒研修会（於西雲寺）

親鸞聖人のご生涯

晩年の親鸞

正像末和讃をつくる

人間八十歳にもなると、身体や精神が衰え静かに余生をおくるというのが普通です。しかし親鸞聖人はそうではありませんでした。八十歳をこえて一層信心のよろこびが高揚し数多くの著述をされています。そこには異義による関東教団の動揺ということもあるのですが、『一念多念文意』（いちねんたねんもんい）『唯信抄文意』（ゆいしんしょうもんい）『尊号真像銘文』（そんごうしんぞうめいもん）など、誰でも読める和語の聖教を書いて関東のお同行に送っておられます。その中でも特筆すべきは私たちになじみ深い『正像末和讃』百十六首の製作です。報恩講にあげるご和讃は『正像末和讃』の中からいただいており、最後は「如来大悲の恩徳は」で始まる『恩徳讃』でしめくくられています。正像末和讃は、聖人八十四歳の時、異義をとなえた科で長男善鸞を義絶したという悲しいでき事を動機として、今一度本願にたち帰り、本願にすくわれていくよろこびを我身の懺悔を通してうたいあげたものです。

和讃について

親鸞聖人は「和讃」について「やわらげほめ」と左訓をつけてその意味を述べておられます。和讃の「和」は、単に漢文を和文にしたという意味ではなく、それによって「和らげ讃める」という意味が込められているのです。浄土三部経や七高僧のお聖教などは、漢文でとても難しいお聖教です。聖人の主著であり『教行信証』も、もちろん漢文で私たちに理解できるものではありません。それでそれらの意味やおこころを和らげ讃め、そして何よりも唱和するものとしてお造りになられたのです。当時流行していた七五調の、四句で一首となる「今様」（いまよう）と呼ばれる詩の形で、誰でもが唱えることによって、むつかしいお経やお聖教のおこころがいだけるよう後世の私たちのために造って下さったのです。それによって今日私たちは『教行信証』の中にある偈文のかたちで書かれた正信偈と、それに念仏と和讃六首を加え、「正信偈六首引」として毎朝のおつとめとさせていただいているのです。和讃はどこまでも声に出して唱和するために書かれたものであり、「念仏に加えてときどき誦（じゅ）し用いるため」に書かれたと伝えられています。念仏の間に和讃をさしはさむのであり、どこまでも念仏が大切なのです。ご和讃はお念仏の意味をうたにしたものであり、ご和讃をあげることによりお念仏の尊いおこころがいただけてくるのです。私たち門徒は毎朝あげる「正信偈六首引」のおつとめを大切にしたいものです。

三帖和讃

和讃には『三帖和讃』（さんじょうわさん）といって三種類があります。『浄土和讃』百十八首、『高僧和讃』百十九首そして『正像末和讃』百十六首です。その外、親鸞聖人は晩年合わせて五百首に及ぶ和讃を造っておられます。『三帖和讃』に次いで多いのは『聖徳太子奉讃和讃』で、晩年いかに聖徳太子を敬っておられたかが伺えます。

『浄土和讃』は浄土の三部経、すなわち『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』によって阿弥陀仏とその浄土を讃えたもので、私たちが毎朝あげている「弥陀成仏のこのかたは…」以下六首は『浄土和讃』の冒頭の六首をいただいています。『高僧和讃』は、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空という七高僧の教えを和らげ讃えたものです。皆さんに親しみ深いものに

本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みちみちて
煩悩の濁水へたてなし

があります。私たちが人生において如来の本願に遇うことができれば、その人生がどのように、罪深くまた苦労の多いものであっても私の身に南無阿弥陀仏の名号の功徳がみちみちて下さって、煩悩や罪は如来の大悲をよろこぶ功徳へと転せられるのです、という意味です。『浄土和讃』『高僧和讃』いずれも聖人七十五歳から七十六歳にかけてお造りになられたものです。

正像末和讃

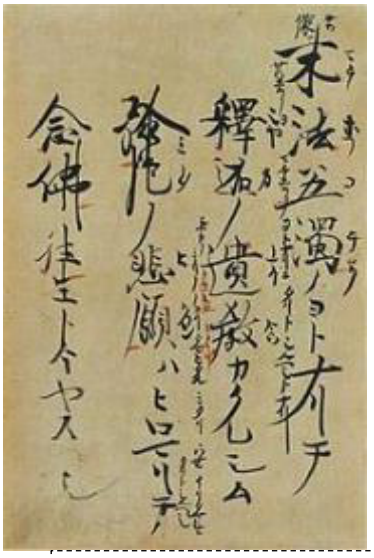
『正像末和讃』は聖人八十四歳の時に長男善鸞を義絶したというつらいでき事を通していよいよ罪深き我身を懺悔すると共に如来の回向によってたすかっていく有難さ尊さを讃えたものです。「正像末」とは正法、像法、末法のことで仏教の歴史観を表わすものです。「正法」の時代とはお釈迦さまが亡くなって五百年は法が生き生きと働き、行ずる者も悟る者もある時代。「像法」の時代とは「正法」が過ぎて千年、この時代は仏法もやや衰えて形だけのものになっていき、法はあり行ずる者もいるけれども悟る人は一人もいなくなる時代、「末法」とはその後一万年は法も学問化していき行ずる人も悟る人もいない時代をいいます。親鸞聪

人の時代は既に「末法」の時代に入っており、お釈迦さまが入滅されて千五百年以上もたっています。聖道自力の教えは「正法」「像法」の時代には大いにその力を発揮しても「末法」の時代に入ると時代は濁り、人間の器量は衰えて間に合わなくなるのです。それに対して弥陀の本願のお念仏のみ教えは、「正法」「像法」「末法」を問わず、一切衆生をすくうまことのみ教えでありますが、「末法」の世になってますますその真実性が顕わになるというのです。「末法五濁の世」というのは、そのような時代が私の外にあるのでなく、仏法を求めようと歩み出した者に到り届いた危機意識です。よく「この世は末法だ」という人がいますが、それは末法ということを外に見ているものであり、自分の内に自覚されたものではありません。仏法を求めようと思っても、仏法に遇い難い時代に生を受け、仏法を聞かせていただいても、我身にいただけず、外面は仏法を聞いているように見えても、内心は自分の幸せを願っているのではないかという悲しみと懺悔のところに「末法の世到れり」という自覚があるのです。

正像末和讃をいただく

正法の時機とおもえども
底下（ていげ）の凡愚となれる身は
清浄真実のこころなし
発菩提心いかがせん

今は正法の時代であり、自分は正法の人であると思い、いくら身を励ましてみても、煩悩の底に沈む凡愚に生まれるこの身に、清浄真実の心はないんだ。そんな私が菩提心を起こすということなど、どうしてできるのでしょうか。



宗祖真筆『正像末和讃』
高田専修寺蔵　国宝

末法五濁の世となりて
釈迦の遺教（ゆいきょう）かくれしむ
弥陀の悲願ひろまりて
念仏往生とげやすし

末法五濁の世になってみると釈迦の遺教は消えてなくなった。お釈迦さまの教えは隠れてしまった。しかしそこにはじめて本当の人間の自覚が生まれてくるのです。お釈迦さまの教えはもう残っていないのだとはっきり見定めたときに、はじめて弥陀の悲願というものが人間の自覚として頷かれてくるのです。

無明長夜の燈炬（とうこ）なり
智眼（ちげん）くらしとかなしむな
生死大海の船筏（せんばつ）なり
罪障おもしとなげかざれ

現実を生きるということは、自己を引き受け、その時代を背負っています。そこにはいろんな悲しみや苦しみがあります。しかし本願のおはたらきは長い無明の闇を破る燈です。智慧に暗いこの身であると悲しむことはありません。本願は迷いの海を渡してくれる船です。罪障深い我であると嘆かないでください。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

私たちは如来の大悲、そしてその大悲を生き、伝えて下さったお釈迦さまはじめ七高僧の方々の恩を知り、報ずべき存在としてあるのです。しかし、その深く尊いご恩を忘れがちなお恥ずかしい私です。お念仏申すところに、そのご恩が知らされます。

（住職）

愛読者、美和子の「目からウロコ」

私は「親鸞聖人のご生涯」が大好きです。とても長く、漢字も多いのですが、時代背景や親鸞聖人のお気持ちがとても細やかに書かれていて、その時代にタイムスリップしたかのようです。そして、新たな発見が出来るのも大きな魅力です。まるで「目からウロコが落ちる」ような感覚です！

今回の驚きは、晩年の親鸞聖人がつくられた和讃が私たちに親しみやすいように、わざわざリズムのいい、当時流行していた七五調で書かれているという点、それは今の時代でいうと、お聖教をアイドル歌手に歌ってもらうとか…難しい漢文のお聖教を、かみ砕いて和語にしてくれるだけでもすごいのに、さらに少しでも親しみやすいように、七五のリズムに乗せて私たちにのこして下さった事、しかも、それがハ十歳を過ぎた方のアイデアかと思うと、その斬新さに驚きます!!

親鸞聖人もハ十歳を過ぎ、このシリーズも終盤ですが、まだまだ目が離せません！

西雲寺のルーツをたずねて

約400年前、高田派の専修寺(せんじゅじ・越前本山)が建っていたこの場所は、今でも寺屋敷と呼ばれています。この境内にあった脇寺(勧明坊かんみょうぼう)が、西雲寺のルーツです。

畠中町の方に案内していただきました。

納骨堂の跡と伝えられます

歴史っておもしろい♪

今から400年前って、若い人はずいぶん昔に感じるかも知れませんね。でも、ウチの方が古いよ～という物知りのお年寄りもいらっしゃることでしょう。それもそのはず、殿下に泰澄大師がやって来たのが約1300年前、殿下に平家の落人がやって来たのが約800年前ですから、もっともっと前から村々は存在したのです。

西雲寺が生まれる80年ほど前、山がごっそりと崩れて川がせき止められ、武周ヶ池ができました。去年、紀伊半島で起こった災害と同じですね。その時、夢のお告げを信じて逃げのびた家族がいたのですが、武周は受け入れてくれなくて、隣の二ツ屋に住まいした、そんな話も語り継がれています。

時代はちょうど戦国の乱世から徳川幕府へと移り変わろうとする頃です。親鸞聖人が亡くなられて200年後の戦国時代、念仏する人はつらい目にあっていました。旧体制の僧侶から憎まれ、時の権力者を通じて焼き討ちされることもしばしばだったのです。念仏の平等の世界を大事にするというのは、命がけだったんですね。

天災や飢饉も深刻でしたが、続く戦にかりたてられたり、重い年貢にあえいだり、皆ぎりぎりの生活でした。そんな政治への不満を爆発させる急な動きを押さえきれず、民衆が権力者とぶつかる出来事が起こります。一向一揆です。お隣の加賀では、念仏を掲げる百姓さんたちが100年に渡って国を治めるほどでした。一方越前では、朝倉氏による念仏禁圧が続きました。ただ、高田の流れに属すると言えば見逃され、本願寺の流れに属するなら田んぼ没収、国外追放など、念仏と政治とをごちゃまぜにした禁圧の仕方でした。

佛光寺派の母体は武蔵国（東京付近）ですが、高田派も関東の流れ（下野国）で、法然上人や聖徳太子をシンボルとしてまとまっていました（武周にも聖徳太子像を伝える旧家があります）。高田派は早くから越前に念仏を伝え、親鸞聖人の教えの源へ帰ろうとする純粋さを持っています。一方、本願寺派というのは京都の親鸞聖人の子孫をシンボルとしてまとまっていました。蓮如上人によって越前に広まり、信心ひとつという純粋さを持っています。お互い、憎み合う筋合いは全くないのですが、政治に翻弄されるうち、不幸にも刃を交える事態も起こったようです。

山崩れによって武周ヶ池ができた頃、織田信長が大坂の本願寺本山を焼き討ちにしました。続いて越前に攻め入り、朝倉氏を滅ぼしました。朝倉の禁制から自由になった本願寺派の念仏者たちは、あっという間に越前の国を治め、加賀のように自治をと思ったのですが、あっという間に織田軍に全滅させられます。厳しい追っ手が放たれますが、高田派だといえば見逃してもらえたようです。

時の民衆には、恐ろしい織田軍に真っ向から立ち向かうような迫力がありました。何せ念仏は命がけです。国の藩主をも追い出すくらいですから、時には意のままにならぬ住職を追い出すこともあったようです。逆に、焼けて失われたお寺や本山のためには、これまた命がけで再興に取り組んだのでした。例えば、信長と戦っていた本願寺派の本山に飯米を届けていたのは、大坂でも近江でもなく、なんと越前の門徒でした。ですから、佛光寺派でも本願寺派でも、本山から発する書状の宛先は、寺でもなく僧侶でもなく「総門徒中」なのです。

本山もまた、政治と民衆のはざまにあったことは想像に難くありません。焼き討ちにされた本願寺派の本山は、穏健派と急進派との対立が尾を引いて、徳川家康によって東西に分割されました。高田派の本山も、発祥の地である下野、伊勢の一身田、近江の坂本、そして越前の熊坂（現あわら市）と、土地の民衆に支持された本山が４つありました。悲しいかな、本山の間で後継ぎ争いも起こりました。

「ご門坂」と呼ばれるこの場所に、字の読めなくなった古いお墓が残っています

年代	できごと
500年頃	日本に仏教が伝わる
600年頃	聖徳太子が仏教で世を治める
700年頃	泰澄大師が越知山へ
1200年頃	平家の落ち人が移住
	親鸞聖人ご往生
1500年頃	戦国時代
	あわら熊坂に高田派本山建立
	信長が本願寺を焼き討ち
	信長が越前を壊滅させる
	武周ヶ池ができる
1600年頃	徳川家康が江戸幕府を開く
	本願寺が東西に分かれる
	高田派本山が熊坂から殿下へ
	幕府の命で殿下の本山取壊し（建っていたのは約40年）
1666年	佛光寺本山から文栄師を迎え西雲寺が生まれる
1800年頃	火事で焼失　再建
2016年	西雲寺草創から350年

高田派の越前本山は、熊坂から殿下の地へ移り、越前藩主松平忠直と結びつきますが、忠直は妻（家康の孫）を暗殺しようとするなど乱行の末に謹慎処分を受けます。逆に、伊勢の本山は信長～秀吉～家康と庇護を受け続けましたので、大きな政治の流れの中で高田派の本山は伊勢に統一されていきます。その結果、殿下の本山も、境内にあった勧明坊も、すべて取り壊されました。ところが、殿下を始めとする越前の念仏者たちは、寺を壊されても心を伊勢へ向けなかったのです。幕府という巨大権力からの命令を聞かないとは、すごい迫力です。その代わり、先人たちは京都の佛光寺や本願寺をよりどころにしていきました。それが西雲寺の始まりです（１６６６年）。幕府に逆らった先人たちですが、どういう訳かとがめられることなく、かえって四代藩主松平光通（幕府に忠誠な人）に厚く庇護されました。

少し歴史を学ぶだけで、いろんなご縁に連なっている自分が見えてきますね～（編者）

追　憶　～亡き人からの声なき教え～

昭和 24 年に生まれた私の父、中谷清は平成 24 年 6 月 26 日にその生涯を終えました。死因はすい臓がんでした。緩和ケア病棟に入院し、看護婦さんからは自然の終わり方を行うため「最後を看取れないこともある」と言われましたが、家族そろって看取ることが出来たことは、本当に良かったと思えることでした。

2 月 15 日、大腸の検査で病院に行き、その場で緊急手術、そしてすい臓がんの発見、余命 6 ヶ月の宣告…。家族も衝撃を受けましたが、本人のショックは計り知れなかったことでしょう。

闘病中は、自分の不安を家族に当たり散らすことなく、本当に強い父でした。また、どんなに自分がつらいときも、見舞いに来てくれる親戚・兄弟には笑顔で接し、本当に優しく、笑顔を絶やさず、接していました。

病気発見後、日に日に弱っていく父、細くなっていく体、何度病院からの帰り道で涙を流したか分かりません。父との約束で「俺はお父さんの病気を治すことは出来ないけれど、闘病中のサポートを全力ですることは出来る。だから何も遠慮せずにどんどん思いを言ってきて欲しい」と伝え、自分の中でも、全力でサポートすると心に誓いました。今のお父さんは何をすると一番喜んでもらえるのか？そればかりを考えて一緒に戦いました。そして、息子としての感謝の想いをしっかりと意識のあるときに伝えて、お互いに涙を流しながら、本当の親子として初めて一つになれた感じがしました。父は、病気になりながらも、「お前のような息子が生まれて、俺は幸せな男や。おとうさん頑張るからな！」といってくれました。

幼いときのことはハッキリとは覚えていませんが、楽しいという記憶はしっかりと残っています。どれだけ父から愛情を貰ったか、測ることが出来ません。自分も大人になり、結婚をし、妻という新しい家族が加わってから、嫁を大変気に入ってくれて、娘のように接してくれました。

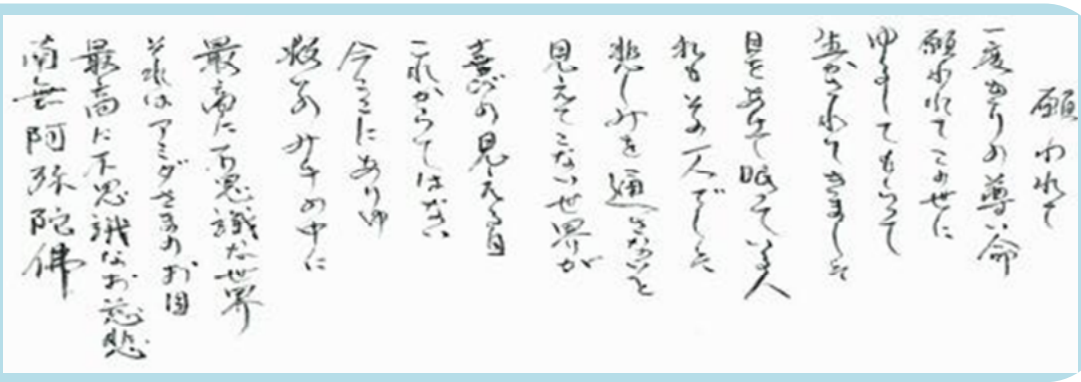
お父さんは、秋吉の焼き鳥（純けい）が大好きで、何かあると「純けいが食べたいな～。」とよく言っておりました。また、カニも大好物で、よく病院にカニのお寿司をもっていくと、おいしそうに食べてましたね。

6 月 19 日夜「また明日くるね、おやすみ」といって握手して別れました。しかし、この言葉が最後の会話になり、翌日からは会話も出来ない状態にまで悪化…。今思い出しても、涙が出てきますが、病気発見後からは精一杯の親孝行が出来たと思います。いままで 31 年間出来なかった会話を、本音で語り合いました。親戚が見舞いに来てくれた際には、必ず「息子が本当によくしてくれる、俺は何もしてやれてないのに…」と涙を流して、話をしてくれていたと聞きました。父からの言葉で、「嫁を大事にしろよ！お父さん今しみじみ思う、側に居てくれる人がいるということがどれだけ大事かということが。お前達夫婦には本当に感謝してる。」自分の妻を大事にする、当たり前のことですが、この言葉を父からの遺言と捉えています。

本当に中谷清の子供でよかったと思える、強くそして優しい父でした。お父さんの子供として、誇りを持ちながら、今後もお父さんの事を忘れることなく、生きていこうと思います。

お父さんの子供でよかった。
育ててくれて本当にありがとう。
そしてたくさんの愛情をありがとう。

福井市文京　　中谷　竹一



西別所町　釈真光妙映
※高田派の法名です

今年もようこそ♪　福島の子供たちショートステイ

7月24日から8月8日まで、殿下全体で福島の子供達をあずかりました。福島市や郡山市を始め、南相馬市や伊達市などからやって来た70名を越える親子が夏のひとときを過ごしてくれたので、普段は静かな村がとてもにぎやかでした。お寺では、関西から来てくれたボランティアの学生さんもおあずかりしました。沢山の人たちの協力のおかげですね。

仮設住宅から参加してくれた子もいましたし、下の写真や感想から、福島ではまだまだ不自由な暮らしを強いられていることが分かります。被災地から望まれる間は続けていかねばと思います。

いただいたアンケートより（抜粋）

☆新しい友達も出来て、とても喜んでいました。別れ際に涙を流すくらいでした。ホームステイで何から何まで面倒を見ていただき本当にありがとうございました。（保護者）

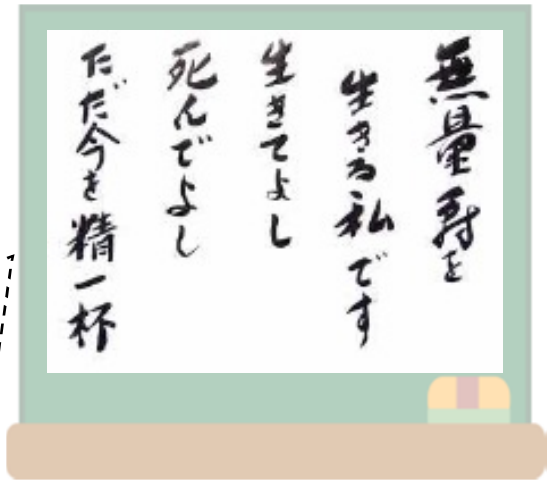
☆福島では、除染もまだ始まったばかりです。原発収束なんて一生ありえないかも。殿下では、とても楽しく内容の濃い一週間でした。命を助けていただきありがとうございました。（保護者）

☆私は昨年もお世話になったのですが、今年もお世話になれて本当にうれしかったです。来年も実施してほしいですし、また、殿下に行きたいと思っています。（こども）

☆村の方たちとの心の交流、参加者どうしのつながりがとても嬉しかったです。私たち親子にとって、殿下は一生忘れられないところになりました。「目には見えない大切なもの」を改めて考えさせられた時間でした。（保護者）

☆一度も見たことのない虫がたくさんいました。福島の子が楽しそうに石を削りながら「今までこんな遊びしたことなかったなぁ」と言っていたのを耳にしました。福井は、ラジオ体操、民謡レッスン、ソフトバレー、お寺のお参りなど、五日間の滞在中だけでも、地域の人と一緒に集まる機会がとても多いと思いました。（ボランティア学生）

山門掲示板



無量寿という如来さまのいのちは、迷いの衆生のいのちの根底にあって、私たちのいのちを生かし続けて下さっている如来さまの大悲であります。私たちのいのちは常に自我にとらわれて、生と死、自と他、善と悪など二つに分段し、都合のよい方に執着し、不安や不満を抱えながら生きています。しかし、私たちの心の奥底には、一切の人々といのちを生き合い、どのような人生を歩もうとも、その境遇を受け止めて、自分自身のいのちを生きたいという真実の欲求があるのです。しかし、このいのちの欲求は自我におおわれている限り、表に出てくることはありません。無量寿という如来さまの絶対無限のいのちは大悲となって、私たちの我執のとらわれを破り、限りある有限なるいのちを生かしめ歩ませて下さるのです。（住職）

佛光寺派福井教区 門徒研修会 開催される

6月23日（土）に、西雲寺を会場として、佛光寺派福井教区門徒研修会が開催されました。講師には佐野明弘師（加賀・光闡坊）をお迎えし、「人間をいきるとは―親鸞聖人に聞く―」と題してお話いただき、佛光寺派の各寺のご門徒さん約１００名が熱心に聴聞され、その後質疑応答が行われました。

先生は、人間というのは六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）という生死流転する迷いの境界を生きるものであるが、唯一生きることに迷い苦悩する存在である、これは人間界にだけ与えられた尊い特徴である、私たちはそのことを自覚することはあまりないが、如来の大悲はそこにそそがれているのだとお示し下さいました。

発　行
真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　吉川芳弘
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！
お手元に２部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。